

事後評価報告書(日南ア研究交流)

1. 研究課題名:「新奇乳酸菌のプロバイオティクスならびに抗菌性ペプチドを用いた病原菌に対する新たな戦略」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:東京大学大学院農学生命科学研究科 教授 伊藤 喜久治

2-2. 南アフリカ側研究代表者:ステレンボッシュ大学 理学部

教授 Leon Milner Theodore Dicks

3. 総合評価:(B)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

バクテリオシンあるいはバクテリオシン産生菌そのものをナノファイバー内に封入する技術を開発し、またナノファイバーに封入するのに適したバクテリオシン産生菌のスクリーニングも行なった。さらに新規バクテリオシンを発見し構造を決定した点は評価できる。一方、当初の計画であった乳酸菌のプロバイオティクスとしての *in vitro* および *in vivo* の評価については結果が得られておらず、また、*adhE* 遺伝子を *Fructobacillus* 属菌種に組み込み、その代謝を解析するとの実験の結果も得られていない。これらの点が研究成果において「いずれでもない」との自己評価となったものと考えられる。

(2)交流成果の評価について

日本側から若手3名を含んだ計 10 名、また南アフリカ側からは計6名と意欲的に交流を行っており、プロジェクト終了後も南アフリカとの良好な関係が続いている点は評価できる。一方、ワークショップは1回のみであり、本研究課題を中心とした国際シンポジウムやワークショップの開催などの交流の成果を公表する場がもっとあることが望まれた。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

参加組織が多く、それぞれの役割分担とその有機的連携で不明確な部分があった点が残念である。